

地球プラス5%

ラリー・ハニガン (オーストラリア 1971-2009)

この話は1971年にラリー・ハニガンによって書かれた。その唯一の目的は、現実のシンプルな算数と、現行の銀行制度について --

つまり100にゼロを足しても105にはならないこと、そして何もないところから作られたものに利子を課しても返済は不可能であり、またそれによって、何もないところからお金を作る者（つまり銀行）に大きな権力を与えている、ということを説明することである。

お金（マネー）とは便利な日用品ではなく、貸し方・借り方の帳簿システムであり、それ以上のものではない。

この話は人々に対する教育ツールとしてインターネット上に公開された。多くの人がこの話を取りあげ、他の言語に翻訳してインターネット上で公開してくれたのはとても役にたった。

だが残念ながらある人はこの話を利用し、私へ知らせることなくこの話の作者は自分だと主張した。それだけではなく、この話を自分の考えにあわせて変造し、一部を削除してさらに陰謀説（真実かまたは偽りの）や、いわゆる古代の知恵とかミステリーとか宗教的な話を加えている。そうすることによって、これらの人々は実際、敵を助けていることになる。

どうやって？

遅かれ早かれ、アクトン卿の言葉が現実となるだろう。『何世紀もの間ひろまり、遅かれ早かれ戦わなければならない問題とは 「人と銀行」の戦いだ』

あらゆる言語で、日々、戦いの日が近づいている。敵が人々を分断し、また100+0は105にはならない、という真の問題から目をそらさせるためにこの話を利用できるような使い方はしないで欲しい。

(原文は www.larryhannigan.com に記載されています。)

地球プラス5%

ラリー・ハニガン

ファビアンは明日大衆に向けて行なう講演の予行練習をしながら、わくわくしていた。彼がいつも求めていたのは威信と権力であり、いよいよその夢がかなう時がきたからだ。ファビアンは金銀を使ってジュエリーや装飾品を作る職人だったが、生活のために働くことに満足できなくなった。彼が求めているのは興奮でありチャレンジだった。それが今始まろうとしている。

何世代にもわたって人々は物々交換取引を行なってきた。家族を扶養する男は、すべての必需品を自分で用意するか、または特定の物を生産していた。そして生産物に余剰がでると、それを他の人の余剰品と交換した。

市場がたつ日はいつも騒がしく、ほこりっぽかったが、人々は大声でやりあったり、手を

振ったりといった交流を心待ちにしていた。かつてそこは楽しい場所だったが、いまは、あまりに人が増え、言い争いが多くなってしまった。おしゃべりをしている時間はなくなり、もっとよい制度が求められていた。

一般に、それまで人々は幸福で、自分たちの仕事の成果を享受していた。

それぞれのコミュニティにシンプルな政府が作られた。その役目は、個人の自由と権利が守られるよう、そして他者や他の組織の人から個人の意思に反することを強要されないようにするためだった。

それが政府の唯一無二の目的であり、各政府の長は彼を選出した地域コミュニティから自発的に支持された。

しかし、市場の日については、彼らが解決できない問題の一つだった。ナイフ1本はともろこし1籠と交換すべきか、2籠か？牛と荷台はどちらが価値があるか、といった問題だった。よりよいシステムを、誰も思いつかなかった。

ファビアンは次のように告知した。「物々交換の解決策があります。明日の市民集会へ、皆さんどうぞきてください」

翌日、市街広場には多くの人が集まった。そこでファビアンは、「通貨(マネー)」と呼ばれる新しいシステムについて説明した。それはいい話のようだった。「どうやって始めればいいのか？」と市民は聞いてきた。

「装飾品や宝石に作り上げる金(ゴールド)は優れた金属です。変色しないし、錆びないし、ながもちします。金で硬貨を作り、1つの硬貨を1ドルと呼びましょう」

彼は、いかにして価値が決まるか、そしてその「硬貨」が実際は交換の媒体となり、物々交換よりもずっと良いシステムになると説明した。

一人の知事が尋ねた。「ある人は金を掘って自分で通貨を作ることができる。それでは不公平だろう」

これに対してファビアンにはもう答えの用意ができていた。「政府が認めた硬貨だけを使えるようにして、そこに特別の印をつけます」。これは理にかなっているようだった。そしてすべての人が同じ数の通貨を与えられることが提案された。するところそく職人が、「でも私は一番たくさんもらう権利がある。だって皆が私のところそくを使うから」と言った。農民は「それはちがう。食料がなければ死ぬ。だから私たちが一番たくさんもらうべきだ」。激論が続いた。

しばらく議論をさせたあと、ファビアンは最後に言った。「誰も同意しないので、あなたが要求する額を私からもらうというのではどうでしょう。返済能力の範囲内なら、制限はありません。多く受け取った人ほど、1年後には多く返済しないといけません」。人々はファビアンに、「あなたは私たちから何を受け取るのですか」と尋ねた。

「私は通貨を供給するというサービスを提供するのですから、その仕事の対価をもらう権利があります。あなたがたが金貨を100枚受け取ったら、1年後に私に105枚返すのはどう

でしょう。5枚が私の手数料です。これを利子と呼びましょう」

ほかに方法がないようだったし、手数料として5%はわずかなものだと思っただけで、来週金曜日にもどってきてください。これを始めましょう」

ファビアンは時間を無駄にしなかった。昼夜硬貨を鋳造し、一週間がたつ頃にはすっかり準備万端となった。彼の店の前に人々が列をなし、政府が硬貨を調べて承認したあと、システムが始まった。ある人は少しだけ借りてさっそく新しいシステムを試みようとした。

人々は通貨はすばらしいことを発見し、すぐにすべてのものをゴールドの硬貨、またはドルで価値を換算するようになった。彼らがものに認めた価値は「価格」とよばれ、その価格は生産に必要とされた作業量に対しておもにつけられた。作業がたいへんだと価格は高く、簡単なものだとかなり安くなるという具合だった。

ある町にアランが住んでいた。彼はその町で唯一時計を作る職人で、彼の時計の価格は高かった。なぜなら顧客は彼の時計を手にするために喜んでお金を払ったからである。

あるとき別の男が時計を作り出し、売れるようにとアランより安い価格で提供しはじめた。アランは値下げを余儀なくされ、するとすべての価格が下がったために二人とも安い価格で高品質のものを提供するために一生懸命働かなければならなくなった。これは真の自由競争だった。

建設者、輸送者、会計士、農民などあらゆる仕事で、同じことが起きた。顧客はいつも、もっともよい取引と思われるものを選んだ。選択の自由が与えられたのだ。認可や関税といった他の人が事業に参入するのをはばむ人工的な保護制度はなかった。生活水準は向上し、しばらくすると人々は通貨がないときはどうしていたのだろうと思うほど、お金はなくてならないものとなった。

その年の終わりにファビアンは店をでて、お金を貸したすべての人を訪れた。ある人は借りた以上のお金を持っていた。しかしつまりそれは、最初に作ったお金の額は決まっていたため、他の誰かは借りたお金より少ないお金しか持っていないということだった。借りたお金以上を持っている人は借りたお金の5%をプラスしてファビアンに返済したが、この取引を続けるために、またファビアンから新たにお金を借りなければならなかった。

最初に借りたお金よりも少なくなっていた人は、初めて自分に借りがあることに気づいた。ファビアンはもっと多くのお金を貸すまえに、彼らの持っている資産を担保としてとりあげた。誰もが追加分の5つの硬貨を集めようとがんばったが、それはいつもたいへんだった。

結局のところすべての硬貨をファビアンに返済するまでは、国全体が借金から抜け出せないということを誰もわかっていなかった。たとえ全額を返済しても、100の硬貨に対して誰にも貸し出されていなかったわけではない5つの余分な硬貨を払わないといけなかったからだ。利子を支払うことは不可能だ、ということを知っていたのはファビアンだけだった。なぜならその利子分の追加の硬貨はもともと作られてはいなかったのだから、誰かが取り損なうのは当然だった。

たしかにファビアンもいくつかの硬貨を使った。しかし全体の経済の中の5%にあたるよ

うなたくさんの硬貨を一人で使うことは不可能だった。なぜなら何千人もの人に対して、ファビアンはたった一人だったから。

さらに、ファビアンは当時も金細工職人として快適な暮らしを送っていた。

ファビアンの店の裏には金庫室があり、人々はそこに硬貨を保管しておくことと便利だということに気づいた。保管金額とその期間によってわずかな手数料を取った。ファビアンは硬貨を受け取ると受領書を所有者に渡した。

ある人が買い物に行くとき、いつもたくさんの金の硬貨を持ち歩かない。そのかわり、買いたいものがあると店の主人に、その商品の価格分だけの受領書を手渡した。

店主がその受領書を本物だと認めれば、コインの代わりに受け取る。それをファビアンのところへ持っていけば、それに相当するコインをファビアンからうけとることができると思ったからである。こうして、金ではなく、受領書が人の手を渡るようになった。人々は受領書に信頼をよせるようになり、硬貨とおなじようにそれを受け取った。

しばらくしてファビアンは、実際に金の硬貨を要求する人がほとんどいないことに気づいた。

ファビアンは思った。「これらすべての金がここにあり、いまでも勤勉な細工職人だ。これはおかしい。硬貨を使うためには私によるこんで利子を払う人が多くいるはずなのに、この金はここにあってほとんど取りに来ることはない。

たしかに、金は私のものでない。でも私が持っている。それだけが重要なことだ。私は硬貨をつくる必要はほとんどなく、金庫にある硬貨を使えばいい」

こうして最初は用心深く、少しずつ金庫の硬貨を借しだし、それも大額の担保の存在を確かめてからだだった。しかしファビアンはだんだん大胆になり、徐々にたくさんのお金を金庫から貸し出すようになった。

ある日大きな金額の貸し出しを求められた。ファビアンは、「すべて硬貨として持つのではなく、あなたの名前で預金をつくれます。私はあなたに硬貨の価値に相当する受領書を渡します」といった。借り手は同意し、たくさんの受領書を持ち帰った。こうした彼はお金を借りたが、それでも金は依然として金庫にあるままだった。顧客が帰ったあとファビアンはほくそえんだ。ケーキを食べてもまだケーキがある。彼は金を貸し出し、それでも彼の持ち物として持ち続けることができた。

友人、他人、敵でさえも事業を続けるために資金が必要だった。そして担保を出せば、必要なだけ借りる事ができた。ファビアンは受領書を書くだけで金庫にある金の何倍もの価値のお金を貸すことができた。そしてファビアンはその金の所有者でもなかった。本当の所有者が金を要求しないかぎりすべては安全で、人々の信頼は保たれた。

彼は個人ごとの債務と債権をしめす帳簿をつけた。貸し出し事業はじつに高収益だった。

コミュニティにおけるファビアンの社会的立場は、彼の富と同じく増した。彼は重要人物となり、尊敬をあつめた。金融について、ファビアンの言葉は神聖な発表のようだった。

ある日、ファビアンの行動に興味をもった他の町の金細工師たちが会いにきた。

ファビアンは彼らに、自分がやってることを教えたが、これを秘密にしておくことが必要だと強調することを忘れなかった。

もし彼らの計画が暴露されたら目論見は失敗する。だから彼らは、独自の秘密の同盟を作る事に合意した。

それぞれの細工師が自分の町にもどり、ファビアンが教えたことを実行し始めた。

人々は受領書を金そのものと同じ価値があるものとして受け取り、多くの受領書が硬貨と同じように金庫に保管されるようになった。商人が商品の支払をしたいとき、かれはファビアンに自分の口座から別の商人の口座にお金をうつすように指示した。ファビアンにとってこれは数字を変えるだけだったので数分でできることだった。

この新しいシステムは一般的になり、この指示のメモは「小切手」とよばれた。

ある夜遅く、金細工師たちは別の秘密会議をひらき、そこでファビアンは新しい計画を発表した。

翌日、ファビアンたちは全ての知事を集めて会議をひらいた。「われわれが発行する受領書はとても評判がいい。もちろんあなたたちも使っていて便利だと思ってるでしょう。」知事らは同意し、ファビアンは何をいいたいのかといぶかった。ファビアンはこう続けた。「ある受領書は偽造者によって偽造されています。これは止めないといけません」

知事たちは警戒した。「自分たちに何ができるというのだ」とファビアンにたずねると、「私の提案は、まず、特別な紙に精巧なデザインをした新しい紙幣を印刷することを政府の仕事にすることです。そして紙幣一枚ずつに、知事のサインをします。われわれ金細工師が印刷費用を喜んで払います。それによって私たちが受領書を書く時間が節約されるのですから」。これに対して知事は「ニセモノから人を守ることは政府の仕事ではないか、確かにその助言はいい考えだ」といって紙幣の印刷に合意した。

次に、とファビアンはいった。「ある人は金を掘り出して自分の金硬貨を作っています。金塊を持っている人はそれを差し出さないといけないという法律を作るべきです。もちろん、代わりに紙幣と硬貨を彼らはどう取ります」

これも良い考えのようだったので、知事たちは深く考えることなく大量の紙幣を印刷した。紙幣には1ドル,2ドル,5ドル,10ドルといった価値が印刷され、金細工師はわずかな印刷代を支払った。

紙幣になって持ち運びがずっと簡単になり、すぐに人々はこのシステムを受け入れた。しかしその人気にもかかわらず、この新しい紙幣と硬貨は全取引の1割にしか使われなかった。記録では全ビジネスの90%は小切手システムであったとなっている。

ファビアンの次のプランが始まった。それまで人々はお金を預かってもらうためにファビアンにお金を払っていた。しかしもっとたくさんのお金を人々から集めるために、ファビアンは預かったお金の3%の利子を払うことにしたのだ。

ほとんどの人は、自分が預けたお金が5%の利子でまた貸しされ、ファビアンは2%だと思っていた。さらにはそれまでのように預かってもらって保管料の手数料を払う代わりに3%の利子をもらうのだから、人々はファビアンが2%を受け取ってもそれを疑問に思うことはなかった。

預金の額が増えるにつれて、さらに金庫のお金が増えるとファビアンは、金庫に入ったお金100ドル当たり、200ドルとか300ドルとか400ドルとか、多いときには900ドルも貸し出すことができるようになった。ファビアンはこの9対1の比率を超えないよう、慎重にした。なぜなら10人中1人は、お金を返すよう要求したからだ。

要求されたときに十分なお金がなかったら、自分の預金帳にいくらお金があるか示されているので人々は疑いをもつ。そうはいつてもファビアンは実際には100ドルしかないのに自分で小切手を書くことによって900ドルを貸せばその5%である45ドルを利子として要求することができた。貸し出したお金と利子、945ドルが返済されると、借方の900ドルは消され、ファビアンには利子の45ドルが自分の利益となる。なので金庫からまったく出ることのない100ドルの預金に3ドルの利子を払っても彼は十分満足だった。これはつまり、金庫にある100ドルごとに、ファビアンは42%の利益を出す事が可能ということだ。ほとんどの人はファビアンの利益は2%だと信じていたが。他の金細工師も同じことをしていた。ペンで書くだけで、何もないところからお金を作り出し、その上に利子を要求したのである。

確かに金細工師たちは硬貨も鋳造せず、政府が紙幣や硬貨を作って金細工師に渡し配布させるようになった。ファビアンの出費はわずかな印刷費だけだった。それでも彼らは何もないところからお金を創造し、それに利子を要求した。大部分の人はマネーサプライは政府がやっていると信じていた。また大部分の人はファビアンが誰かが預金したお金を貸し付けていると思っていた。しかし奇妙なことに貸し出しがなされても誰の預金も減らなかった。もし人々が一度に預金をおろせば、この詐欺はあばかれたであろう。

貸付が紙幣か硬貨で要求されても問題はなかった。ファビアンは政府に、人口増加と生産増加によって、より多くのお金が必要とされていると説明し、わずかな印刷手数料を払って追加の紙幣や硬貨を政府から受け取った。

ある日思慮深い一人の男がファビアンのところへきた。「この利子手数料はおかしい。100ドル貸すごとにあなたは105ドルの返済を求めている。しかし追加の5ドルは存在していないのだから、ぜったいに払えない。

農民は食料を生産し、生産者は商品を作っている。しかしあなただけがお金を作っている。この国に2人のビジネスマンしかいないとして、残りの人はすべてどちらかに雇用されているとしよう。もし2人が100ドルずつ借りて、賃金、経費などで90ドルを払えば、10ドルが利益（ビジネスマンの賃金）となる。つまり合計の購買力は90ドル足す10ドルの倍で200ドルだ。それでも2人があなたに返済するためには合計で210ドル分売らないといけなない。1人が105ドル分売れたら、もう1人は95ドル分しか売れない。なぜなら、お金は全部で200ドルしかないのだからもう1人の製品の一部分は売れ残るのだ。

それでもビジネスマンはファビアンに10ドル返さなければならず、そのためにはあなたか

らもっとお金を借りないといけないのだ。これは不可能なシステムだ」

男は話続けた。「だからファビアン、あなたは105ドルを発行するべきだ。100を私の分、5をあなたの分として。こうすれば、105ドルが流通し、債務を返済できる」

ファビアンは静かに話をきいていて最後にこういった。「金融経済は実に深いテーマなのだ。勉強するのに何年もかかるのだよ。この問題の心配は私に任せてくれ。あなたは自分のことをしなさい。もっと効率よくことを行ない、経費を削減してよいビジネスマンになりなさい。これらの問題について、いつでもあなたを助けるつもりです」

男は納得いかなかったが、その場を去った。ファビアンのやり方は何かがおかしく、質問をうまく避けられたと男は思った。

それでも大部分の人たちはファビアンの言葉を尊重した。「彼は専門家だ。他の人が間違っているにちがいない。どんなに国が発展したか、どんなに生産性が向上したかを見るといい。われわれはより豊かになったにちがいない」

借りたお金につく利子をカバーするために、商人は価格値上げをせざるをえなかった。賃金労働者は賃金が安すぎると不満をいった。雇用者は賃金を上げたら破綻するといって、それを拒んだ。農家は生産物にたいして正当なお金を得られなかった。主婦は食料が値上がりしすぎると文句をいった。

最後に、ストライキをする人がでてきた。それはかつてはなかったことだった。ある人は貧困にあえぐようになり、それでもその友人や親戚も、その人を助ける余裕はなかった。大部分の人は、自分たちのまわりに存在する真の富、肥沃な土地や偉大なる森林、鉱物や牛たち、のことを忘れてしまった。人々が考えるのはお金のことだけになった。そしてお金はいつも足りないように思えた。それでも人々が金融システムに疑問を持つことはなかった。なぜならそれは政府が運営していると、信じていたからである。

ごく一部の人は、余ったお金を貯めてそれを人に「貸し付けたり」「融資」する会社を設立した。この方法で彼らは6%以上の利子を手にすることができた。これはファビアンの3%よりは割がいいが、しかし彼らは自分たちが持っているお金しか貸すことはできなかった。なぜなら彼らは何もないところから通帳に数字をいれるだけでお金が作れるという奇妙な力は持っていなかったからである。

これらの融資会社の存在はファビアンや彼の友人たちを心配させたため、いくつかの融資会社をファビアンたちもすぐに設立した。それは軌道にのるまえに他社を買収することがほとんどだった。すべての融資会社はこうしてすぐにファビアンたちに所有されるか、その支配下にはいった。

経済状況はさらに悪化していった。賃金労働者は経営者だけが多く儲けていると信じ、経営者は労働者がなまけていて賃金分だけはたらいてないと言った。誰もが誰かを非難した。知事はそれにたいする答えを出すことはできなかったし、それよりも緊急の問題は困窮にあえぐ人々を助けることのようにだった。

こうして政府は福祉政策を始め、人々に貧しい人のために寄付を強請する法律を成立させた。これは多くの人々の怒りを買った。なぜなら人々は周りの人を助けるのは自発的行為であるべきという古い考えを信じていたからだ。

「これらの法律は法的な泥棒にすぎない。人の意志に反して何かを取り上げることは、それがどのような目的で使われるかにかかわらず、盗みに等しい」

しかし個人としてはなすすべもなく、人々は払わなければ刑務所行きとなることををおそれた。これらの福祉政策は多少は助けとなったが、また問題は再発しさらに多くのお金が対策に必要とされた。これらの政策のために費用がどんどん増え、政府の規模も大きくなっていった。

ほとんどの知事は誠実で最善を尽くしていた。国民からお金をとりたくなかったのも、最後に、政府はファビアンとその友人たちからお金を借りるしか方法がなくなった。知事たちはどうやって返済するか、まったくわからなかった。親は子どもを学校にやる費用が払えなくなった。医者に払うお金もなくなった。輸送機関は破綻した。

政府はこれらの活動を一つずつ、肩代わりしなければならなくなった。教師や医師、その他多くの人が公務員となった。

自分の仕事に満足している人はほとんどいなかった。彼らはリーズナブルな賃金をもらってはいたが、自分たちのアイデンティティは失った。巨大な機械の小さな部品にすぎなかった。

個人々の独創性をだす場所はなく、努力はほとんど認められず、収入は固定化され、昇進は先輩が退職か死んだときだけだった。

しかたなく知事たちはファビアンに助言を求めた。知事たちは彼を賢いと思っていたし、お金の問題を解決する方法を知っていると考えた。ファビアンは彼らが問題を説明するのをよく聞き、最後にこう答えた。「多くの方は自分で問題を解決することはできません。誰かにやってもらう必要があります。たしかに、大部分の方は幸福になる権利があり、生活に必要なものを供給されるべきだということにあなたがたは同意するでしょう。偉大なことわざのひとつに「すべての人は平等である」というのがあるでしょう？」

バランスをとるための唯一の方法は、金持ちから過剰な富をとり、貧しい人々に回すことだ。税金制度を導入するのです。持っている人はたくさんはらう。能力に応じて税金をとり、ニーズに応じて配布する。学校、病院は、金銭に余裕のない人は無料にすべきです」

ファビアンはこうして崇高な理想を語り、最後にこういうのを忘れなかった「ところで私が政府にお金を貸していることを忘れないでくださいよ。かなり長いこと貸しているはずですよ。少なくとも私ができることは、利子分だけ返してもらうことです。元本はそのまま、利子だけ」

知事たちはファビアンの哲学を真剣に検討せず、累進課税を導入した。所得が増えるほど税率が上がるというものだ。誰もこれを気に入らなかったが、税金を払わなければ刑務所行きとなった。

商人はこれでまた価格値上げを余儀なくされた。

労働者は賃金値上げを要求し、多くの企業が倒産するか、または人手を機械に置き換えた。これで失業がまた増えたため、政府はさらに福祉やばら撒き政策を導入した。

特定の業界の雇用を維持するために関税やその他の保護政策が導入された。製造業の目的はものをつくることなのか、または、たんに雇用を提供することなのかとある人たちは思った。

さらに物事が悪化すると、賃金統制や価格統制、その他あらゆる統制が試みられた。知事はなんとしてでもお金を手に入れるために消費税、給与税と、あらゆることから税金をとろうとした。ある人は、小麦を育てる農家から主婦の手にわたるまでに、1斤のパンに50以上の税金が課せられていることに気づいた。

「専門家」なる人々が登場し、何人かは知事に選ばれたが毎年の議会の後、かれらは何も達成しなかった。税金は再構成されるだろうという報道はなされたが、税金の総額はいつも増加した。

ファビアンは利子の支払を要求しはじめた。そして税収のますます大きな部分が、ファビアンへの返済のために必要となった。

そして党派政治が始まった。人々はこの問題を解決するのにふさわしい党はどれかを議論しはじめた。政治家の人格や理想、党のレッテルなどを論じたが、真の問題だけは議論しなかった。議会は困難に陥った。

ある町では、借金が1年間の税収を超えた。全国で未払いの利子が増え続け、未払いの利子にさらに利子がついた。

国の真の富の大部分は徐々にファビアンやその友達がコントロールするかまたは所有するところとなった。そして人々への支配力が大きくなった。しかし支配はそれで完成することではなかった。彼らは全員を支配するまではまだ安心できない、と思った。

このシステムに反対する人のほとんどは金融界の圧力によって黙らされるか、国民の笑いものとなった。それを行なうためにファビアンと友人たちはほとんどの新聞、テレビラジオ局を買収し、経営者も慎重に選んだ。これらの経営者たちの多くは、世界をよくしたいという誠実な願いを持っていたが、自分たちが利用されていることはわからなかった。彼らの解決策は問題がもたらした結果に対するものであって、問題の原因そのものを解決するものではなかった。

いくつかの異なる新聞ができた。右派向け、左派向け、労働者向け、企業経営者向けというぐあいに。しかし真の問題について考えていなければ、どれを信じるかは関係なかった。

ファビアンの計画はほぼ完成した。国全体が彼からお金を借りていた。教育からメディアにいたるまで、ファビアンが人々の心を支配した。人々は、ファビアンが求めるように、考え、信じることしかができなかった。

一人の男が、その楽しみのために使い切れないほどの多くのお金を持ったら、あとは彼を喜ばせるものは何だろうか。支配者層の精神構造を持っている者にとって、その答えは権力である。他の人間を支配する力だ。理想主義者はメディアと政府で利用されたが、ファビアンが捜し求めた真の支配者は、支配者層の精神構造をもつ人々だった。

ほとんどの金細工師も同じようになった。彼らは大きな富の感覚はわかったが、もはやそれに満足できなかった。挑戦と興奮が彼らには必要であり、また大衆に対して権力を持つ事は究極のゲームだった。

彼らは、自分たちは他の誰よりも優れていると信じていた。「支配することは私たちの権利であり、義務である。一般大衆は自分たちに何がいいのかわかってない。だから彼らは集めて組織されなければならない。支配することは、われわれの生得権だ」

全国にファビアンとその友人は多くの融資会社を所有していた。

たしかにそれらは個人的に、別々に所有されたもので、理屈では彼らは互いに競争していた。しかし実際互いに緊密に仕事をしていて、彼らは何人かの知事を説得し、「マネー・リザーブ・センター」という名の機関を設立した。この設立費用も自分たちのお金ではなかった。人々の預金の一部を貸し付けて行なったのである。

この機関は外に対して、政府のオペレーションとしてマネーサプライを規制しているように見せかけたが、奇妙なことにその理事会に知事や公務員が名を連ねることは許されなかった。

政府はもはやファビアンから直接お金をかりず、このマネー・リザーブ・センターからの借用書システムを使うようになった。その担保は、翌年の税金からみこまれる収入だった。これは表面的に政府の運営であるということにして、ファビアンらへの疑惑を取り除くというたくらみとも合致していた。しかし裏でコントロールしていたのはファビアンだった。

ファビアンは間接的に政府をそのように支配していたため、政府は彼のいいなりだった。ファビアンはこう豪語した。「国民のお金をわたしに管理させなさい。誰が法律を作ろうと、私には関係ありません」またどの政治家が選ばれても関係なかった。国民の生活の血液であるお金を管理していたのはファビアンだったから。

政府はお金を調達できたが、すべての貸付に利子が課せられた。福祉や施しの政策によって多くのお金が必要になり、しばらくして、元本はおろか利子だけを返済するのも難しい状態に陥った

そしてそれでも、次のような疑問を投げかける人々がいた。「お金は人間が作ったシステムだ。それは人間を支配するためではなく、人間に仕えるものにするよう変えることはできるだろう？」しかし、そういう人々の数は減っていき、その声は狂ったように架空の利子をかき集めようとするなかで聞こえなくなった。

政権が代わり、党の標語も変わったが、主要な政策は続いた。どの政府が政権につこうと、ファビアンは究極のゴールへ毎年近づいていった。人々の政策は何も意味をなさなかった。人々は限界まで税金をとられ、もはやそれ以上払えなくなった。いま、ファビアンの最終目的を果たすチャンスが訪れた。

マネーサプライのうち10%は、いまでも紙幣と硬貨の形で存在した。疑惑をもたせないために、これを廃止する必要がある。人々が現金を使っている間は、自由に売買することができ、自分たちの生活のある程度コントロールしていた。

しかし紙幣や硬貨をもちあるくのは必ずしも安全ではない。小切手は地元以外では通用しない。したがってより便利なシステムが求められていた。

ここでもファビアンは答えを持っていた。彼の組織は、全国民に、名前と写真、ID番号がかいてあるプラスチックのカードを発行した。

このカードを提示すれば、どの店でも店員は中央コンピュータに電話をして信用格付けをチェックする。もしクリアなら、その人は一定額まで欲しいものを何でも買う事ができる。

最初人々はクレジットで小額を使うことが許された。そしてもし1ヶ月以内に返済すれば利子はつかなかった。

これは賃金労働者にとって都合がよかったが、ビジネスマンが何かを始めるためにクレジットを使ったら、機械を買ったり、製品を製造したり、賃金をはらったり、としなければならぬ。そして製品を売って、クレジットを返済しなければならぬ。返済が1ヶ月をこえると毎月1.5%の利子がつけられた。

利子は年間で18%になった。

ビジネスマンたちは選択肢がなかったために、この利子分18%を販売価格に上乗せした。それでもこの余分なお金、またはクレジット(18%)は、誰かに貸し出されたお金ではなかった。国内あらゆるところで、ビジネスマンは100ドル借りるたびに118ドルを返済しなければならないという不可能な負担を課せられた。しかし、この余分の18ドルは、最初から作られてはいなかったのだ。

それでも、ファビアンと彼の友人たちは、自分たちの社会的立場を上げていった。彼らは尊敬されるべき中心人物とみなされた。ファビアンたちがおこなう金融や経済の発表は、ほとんど宗教的な確信をもって受け入れられた。

税負担が増え続け、多くの小規模企業は破綻した。さまざまな運営には特別な許可が必要だったため、生き残ったものがそれを運営するのは難しかった。ファビアンは大企業のすべてを所有し、支配した。大企業には数百の関連会社があり、互いに競争しているようにみえたが、それでもそれをすべて支配しているのはファビアンだった。いつのまにか競争相手はすべて倒産を余儀なくされた。水道屋、板金工、電気屋といったほとんどの小規模産業も同じ運命にあった。彼らは政府の保護を受けているファビアンの大企業に飲み込まれていった。

ファビアンはプラスチックカードが紙幣と硬貨をなくすことを促すことを望んだ。彼の計画は、すべての紙幣がなくなったあとコンピュータカードシステムを使うビジネスだけが営業活動を行なえるようにすることだった。

そうすると、いずれ、カードをなくす人がでる。そうしたら本人IDが証明されるまで売買ができないようにすることをファビアンは計画した。ファビアンは自分が究極の支配権をもてるような法律を成立させたかった。その法律は、誰もがその手にID番号を入れ墨のように書き込むようにするというものだった。そして数字は特別の明かりの下でだけ見ることができ、それはコンピュータにリンクされ、そのコンピュータは巨大な中央コンピューター

タに接続される。こうしてファビアンは、全ての人間の、すべてのことを知ることができるのだ。

まとめとその他の情報

このお話はもちろんフィクションです。でももしあなたがこの話は気味が悪いほど真実に近いと思うなら、そして実際にファビアンが誰なのかを知りたいければ、手始めに16世紀、17世紀におけるイギリスの金細工職人たちの活動を調べてみるのがよいでしょう。

たとえば、イングランド銀行は1694年に創設されました。オレンジ公ウィリアムはフランスとの戦争によって財政難となり、金細工職人は彼に120万ポンド（当時の金額としては巨額でした）を貸し付けました。その条件として：

1. 利子は8%とする。大憲章(マグナカルタ)が、利子を課したり徴収したりすることは大罪であるとしていることをよく考えてみてください。

2. オレンジ公は金細工職人に銀行を設立することを認め、何も無いところから信用を発行または創造する権利を与える。これ以前は、金細工職人たちが実際に金庫に持っている以上の金の領収書を発行することは完全に違法でした。大憲章がこれを合法にしたのです。

1694年、ウィリアム・パターソンはイングランド銀行を設立することを認可されました。

ところで、このマネー制度の金融界での正しい用語は、『部分準備金』と呼ばれています。

さあ、もっとこれについて良く調べてみましょう。